飛田・コロナ自粛エッセイ番外編（３）
「ちょうちょう・はっし」

●一

「丁々発止」では、ない。「蝶」と「鳥」の話だ。

「蝶」。かわいいと思うが、特別の興味はない。私の幼年期、私は、母が勤める石井幼稚園に住んでいたので、庭があった。ミカンの木に虫がついたりしたら、枝ごととってきて、飼ったこともある。どんな蝶が、あついは蛾（が）が生まれたのか、一匹も記憶がない。

ハイキング好きの私は、自宅の鶴甲団地から六甲山に登る。あるとき、大きな蝶をみつけた。Facebook にアップした。蝶の名前は分からなかった。今なら「グーグルレンズ」で一発にわかる。（このレンズの説明は省略）

するとすぐにコメントがあった。「アサギマダラ」だという。初めての名前だった。フィリピンあたりから日本に飛んできたのだという。感動した。このあたりに自生する草に卵を産むという。が、先日、テレビを見ていたら、北海道に行ったアサギマダラは、別の草に止まっていた。そりゃ、アサギマダラも選り好みはできないのだろう。

南の国から風にのってやってくることにロマンを感じた。が、すぐそのあと、どうして帰るのだろうかと心配になった。なんとなく、赤道から風が北半球に吹き上がるのはイメージできる。でも、本人あるいは、その子どもたち（おそらく子どもだろう）は、南の国に帰らなければならない。そんな風があるのだろうか？　まさか自力で、飛んでいくのではないだろう。こんなことを考えると寝られなくなるので、思考停止とした。彼／彼女らもなんとかやっているのだろう。

●二

私の蝶の先生は、森地重博さんだ。能勢をフィールドに蝶の研究をしている。関連の著書もある。私が鶴甲団地に引っ越してきた最初の日に出会った人だ。今は、大阪に移られたが今も交流がある。私の鶴甲への引っ越しの日、わが家は、「食品公害を追放し安全な食べものを求める会」（なんと長い、通称「求める会」）のトラックでやってきた。そのとき、住民たちにいぶがしかられた。でも、森地さんはちがっていた。

家族ぐるみの付き合いで、いろんなところにいっしょに行った。わが家は娘がひとり、森地家は、娘さんがふたり。上がうちの娘と同級で、もうひとりは２つ下だ。四〇戸の団地だが、当時、そこに同級生だけで５人もいて、毎日にぎやかだった。今は、子どもの声がしたら、うれしくて、窓からのぞいたりする。

どちらも山好きで、北アルプスに登った。娘が小学校低学年のころ、上高地、涸沢から穂高岳山荘に登った。三人の子どもは、しんどい、しんどいとぶーぶーいいながら、山小屋が見えたら、走り出した。

夕食後、みんなでトランプをした。二、三名の登山客も加わった。おもしろかった。夜中、

娘が目を覚ましたとき、そのトランプのおじさんが、起き上がって、変顔をしてくれたそうだ。怖かったが、おもしろかったそうだ。次の日、台風がやってきた。われわれは穂高登頂をあきらめて、朝からトランプをしていた。そのおじさんグループは、完全装備で山頂に向かった。窓から、「バイバイ」とふつうの顔であいさつしてくれた。

どう考えても、おもしろすぎるおじさんだ。たかがトランプなのに、子どもたちは爆笑につぐ爆笑だった。あとで私は、思い至った。「竹中直人」だ。そのあとブレイクしたが、そのときはそれほどの有名人ではなかった。その後、思い出すたびに、私には竹中直人であるという確信が増幅している。娘に、「〇年前、台風の日に穂高岳山荘で女の子三人と遊んでくれたのは竹中直人さんではありませんか」という手紙をテレビ局に出したらと言っているが実現していない。

森地さんとは、神戸学生青年センターの企画で、済州島漢拏山に登ったこともある。

彼のフィールドでもある能勢の三草山にも登った。近くにいた私の高校機械体動部の先輩・成川順さんと山頂で合流した。弁当を食べた。そのとき順さんの娘さんも来ていた。成川彩さんだ。朝日新聞の記者をし、その後、韓国と日本で、韓国映画の専門家として活躍している。ずいぶん前に、むくげの会のゲストディ「法定通訳者」をテーマに来ていただいたことがある。最近でもＺＯＯＭでゲストディにソウルから出演していただいた。むくげの会の韓国合宿という名の単なる旅行で、ソウルの飲み屋でお目にかかったりもしている。

●三

わが家に蝶の絵の掛け軸がある。韓国でいただいた絵だ。いきいきと蝶が飛んでいる。適当にいろんな蝶のいろんな姿を描いているものだと思っていた。が、森地さんに見ていただいたら、ちゃんとした種類も特徴も正しい蝶だとのことだ。何匹か名前を聞いたが忘れてしまった。こんどグーグルレンズで（まだでてきた、ごめんなさい）調べてみよう。

●四

次は、鳥。これにも特別の関心はなかった。が、これは、関心をもった。といっても、最近また急速に薄れている。

「さんだわらわな」

ご存じだろうか。さんだわらは、お米の俵の上下をふさぐ丸い形状のもの。それで、スズメを捕まえるのだ。釣り糸でスズメがお米を食べようとそこに降りてくる。食べる。飛び立とうとすると釣り糸に引っかかってつかまる。

でも、捕まえられなかった。

籠と棒をセットして、そのなかにスズメが入る。紐を引っぱると蓋（ふた）が落ちてつかまる、というのも作った。が、だめだった。

スズメを大量に捕まえたのは、神戸大学時代だ。農学部には温室があった。入れないようにしていたが、中にたくさんスズメがいた。お米をゆったりと、食していた。

これを「退治」したのである。テニスラケットをもった四人が四隅にたつ。スズメをたたき落とすのである。といっても軽くたたいて脳震とうをどんおこさせる。どんどん、どんどんつかまえた。私は、その焼きスズメをそこでは食べていない。料理人はだれだっただろう。

●五

そして、あるときバードウオッティングにめざめた。

愛用のペンタックス二眼レフカメラを思い切って売った。三宮のカメラ店が閉店したというニュースを聞いて、これは早く売らなければと思い、元町まで行った。本体と交換レンズ、これは要りませんというフィルターまで全部売って（？）五万円ほどになったのではないかと思う。

そして、ミラーレスカメラを買った。これが正解だった。デジタルカメラで何枚でも写せる。そして、バードウオッティングだ。いつもカメラを持ち歩いて、鳥を追いかけた。声はすれども姿はみえぬ、という鳥も多い。ウグイスなど、チラッとみたことはあるが、カメラでとらえたことはない。

気に入った写真を年賀状に使ったこともある。でも、私の年賀状は、びっくりするほど文字数。過ぐる一年をふりかえり、次の一年を展望するのだ。鳥だけではものたりない。鳥の年賀状はすぐ卒業した。

あるときは、阪急六甲駅構内のツバメを追いかけた。ずっとみていると楽しい。子どもが餌をねだった大きい口をあけている写真がベストだ。横にチラッと親鳥がうつるのがいいのだが、なかなかそうはいかない。親鳥が邪魔をするのだ。習作はすでに Facebook にはりつけたので、ご覧になったかたもおられるだろう。

●六

神戸大学の旧教育学部に小さな田んぼがある（学部の名前はよく変わるので正式名は省略）。剣道場（六甲台）の隣だ。ツバメは田んぼの泥を利用して巣をつくるのだ、と聞いていた。なら、都会のツバメはどうなんだといつもつっこんでいたが、そこの小さな田んぼでその現場を目撃した。

ちょうど田んぼに水を引いたときにそこに出くわした。水面すれすれをツバメが乱舞するのである。三〇匹はいたか（少々オーバーか？）。なかには、ちゃんと泥を食べている（？）のもいる。例のカメラで写真をとりまくった。が、まさに、乱舞。ピントが合うわけがなく、それらしいのが二、三枚あっただけだ。でもうれしかった。水をはると地中の虫も飛びだしてくるので、それを目当てに来ているのかもしれない。

その後、田植えの時期にはそこをのぞくようにしている。が、それ以降、その乱舞を見ることはない。そして去年今年は、コロナのためその田んぼも休んでいる。残念だ。

あとがき

こんどは「ちょうちょう・はっし」。またふざけたこと書いていると思われそうだ。そのとおりだ。このコロナ自粛エッセイ「番外編」は、「趣味系路線」なのだ。番外編①は、オカリナがテーマだった。二〇二〇年一一月発行なので、それからだいぶたった。

実は、そのオカリナ、ひょんなことから木村篤子さんとジョイントコンサートをすることになった。木村さんは、私の神戸大学農学部農業経済教室の後輩。後輩といっても私がだいぶ留年しているので、だいぶ後輩だ。木村さんは学生時代から神戸大学軽音楽部で活動し、いまも継続的にコンサートを開いているジャズボーカリストだ。彼女が私のオカリナ演奏を Facebook で聞いてくれた。見上げてごらん夜の星を、北の国からの、二曲だ。今年三月、私が西宮オカリナフェスティバルで演奏したものだ。そして、ジョイントコンサートの提案をしてくれた。オカリナエッセイでも書いたように、協調性不足の私は、合奏も伴奏付演奏もしたことがないが、友人のピアニストも参加してくれるとのこと。そして、することになった。そのコンサートは九月二〇日、ワクワク、ドキドキしている。

コロナ、もうだいぶたつのに、またまた第七波が来ている。ここはやはりコロナ自粛エッセイを書かなければならない。本エッセイは蝶と鳥がテーマだ。本文に書いたようにそれほどのめり込んだ趣味ではないが、ほぼ卒業の意味をこめて書いた。

そして、きょう、さっき、長野県宮田のアサギマダラの里に行ってきた。大学時代の友人伊藤一幸さんのところにおじゃましている。昨日、青春１８切符で一〇時間かけて飯田線宮田までやってきた。明日は、またその１８で、新潟に向かう。その後、私も共同代表をしている強制動員真相究明ネットワークの研究集会および佐渡フィールドワークがある。

宮田のアサギマダラの里では、彼ら彼女らが好むフジバカマを地域ぐるみ育てている。シーズンには、たくさんの飛んでくるという。

以上、少々長いあとがきとなりました。次のエッセイをお楽しみにおまちください。

二〇二二年八月二六日　飛田雄一